

第5章 2. 安全なまちづくりへの貢献

高校生は、地域にとって大きな力となります。災害に強い安全なまちづくりのためにどのように貢献できるでしょうか。日頃学習していることを地域の人とのつながりやまちづくりにも生かしている取り組みを知り、これからの地域のために何ができるかを考えましょう。



命を守る避難路整備

石巻工業高校では、震災から1年後の2012（平成24）年5月に、津波により壊滅的な被害を受けた石巻市立門脇小学校周辺の避難路の整備やがれき撤去を行いました。

これまであった津波から避難するための高台への避難路は、地域の高齢の方々にとって歩きにくく、すべりやすい状況となっていて、大きく遠回りしなければならない現状がありました。

そのため、避難路の整備では、同校の土木システム科の生徒が中心となり、3年生全員で避難路に石段を設置しました。

高齢の方々の歩きやすさを一番に考え、実習で学んだことを生かして斜面の角度や石段の積み方を検討し、約1か月かけて整備しました。

この避難路完成後は、高齢の地域住民の方々も安全な高台まで短時間で避難できるようになりました。

現在は、地域の避難訓練のときにも使用されており、地域のコミュニティで、避難路として使用することの共通理解が図られました。

日頃は、地域住民が草刈りをしていますが、整備後数年がたっているので、学校でも再点検をして、補修をするなどのメンテナンスを考えています。



石段を設置する石巻工業高校の生徒



完成した避難路



命を守る津波浸水高ステッカー掲示

多賀城高校のある多賀城市は、東日本大震災の津波による被害を受けました。2015（平成27）年2月28日、多賀城高校の生徒会の9人が参加して、多賀城市内の国道45号にある八幡歩道橋に、東日本大震災の津波の痕跡に合わせて、津波の浸水高を示すステッカーを貼りました。震災後の2013（平成25）年から始めたもので、通学路などで続ける防災・減災活動の一環ですが、国道に掲示するのは初めてのことでした。ステッカーは多賀城高校の生徒がデザインしたもので、「津波浸水深 ここまで」と書かれており、これまで通学路の県道や市道の約100か所に取り付けてきました。

当時2年生の後藤環君は「多賀城は周囲に建物が多く、津波が来てもわかりにくいので標識は役に立つ。高校生が津波の経験を後世に伝える活動には意義がある」と話しています。津波痕跡は月日の経過とともに減りつつあることから、今後は痕跡調査を行うとともに、地域の方々に当時の様子を伺いながら、震災を風化させず、地域の人たちの命を守る津波浸水高を示すステッカーを貼り付ける作業を行っていくこととしています。



津波痕跡の高さを測定



町に掲示されたステッカー



ステッカーは多賀城高校の生徒が考案

多賀城高校への「災害科学科」の設置

2016（平成28）年4月、全国で2例目、県内では初めての防災系専門学科が多賀城高校に設置されます。

「災害科学科」では、東日本大震災から学んだ教訓を将来にわたって語り継ぎ、今後国内外で発生する災害から、一人でも多くの命と暮らしを守っていくための人づくりを目指しています。

